

## 妄想劇場 涙

ある日の名古屋駅、私ははちきれんばかりの想いを懐きながら梨華ちゃんを待っていた。  
すると、梨華ちゃんが名古屋駅に降り立った。

( ^▽^ ): 早く帰らなきゃ。

梨華ちゃんは改札を出るとすぐに私を見つけた。

( ^▽^ ): **Ran** くん、お待たせ。

私：梨華ちゃん・・・。

私は既に感情は限りなく昂っていた。

私は梨華ちゃんと自宅に帰った。

自宅に着くと真っ先に梨華ちゃんを抱きしめた。

私は昂った感情を抑えきれずに泣いた。

( ^▽^ ): **Ran** くん・・・。よっぽど寂しかったんだね。ゴメンね。

私、大泣き。

梨華ちゃんは私の頭をなでなでしながら慰めてくれる。

私は1時間位泣き続けた。

私：ホントにホッとしたよ。梨華ちゃんがないから凄く寂しかった。

( ^▽^ ): あたしに支えられているのね。

私：そういうことです。

( ^▽^ ): あ、**Ran** くんいきなりだけどお願いがあるの。

私：何？

( ^▽^ ): あたし、舞台上で使っていたブランドバックが欲しくなっちゃったの。買い取ろうとしたけど出来なかったの。そこで、**Ran** くんに買ってもらおうかななんて思ってみたの。

私：梨華ちゃん頑張ったもんね。

( ^▽^ ): うん。**Ran** くん、買ってよ。ね。(可愛くおねだり)

私：しょうがないなあ。コメ兵にないか見てみるか。あす仕事が15時に終るからその足で買いに行くか。

( ^▽^ ): うわあ〜い。でも、コメ兵って何？

私：大須にあるブランド物を扱っている名店だよ。

( ^▽^ ): なるほど。

私：その代わり銀行によってからね。

( ^▽^ ): はあ〜い！

私と梨華ちゃんの夫婦物語はまだまだ続く。